

私は、「体位交換」や「体位変換」という用語が介護の現場で使われなくなることを目指してきました。それらは、「人間」に対してというよりも、「人体」に対して使う用語だからです。意識のない重病人ならまだしも、自分の身体と生活の主人公であるはずの要介護老人には相応しくありません。

「体位交換」に対し、私は「寝返り介助」と表現しようと訴えてきました。「寝返り」という自発的行為を介助するのです。しかも介助の介は「媒介」の介でなくてはなりません。私たちが要介護老人の「媒介」にきっかけになるのです。

「介護者は『考える杖』である」と冒頭に宣言した『完全図解新しい介護』が刊行されたのは2003年6月のことです。その後27刷を重ね、累計発行部数は17万部を超えました。もつともこれは日本国内での話で、韓国版、台湾版、中国版を含めると、おそらく世界で最も読まれている介護の本ではないかと思われます。その本に私が寄せた「監修のことば」には、当時の状況がこう記されています。

（いまだに急性期にしか通用しない安静看護法や、患者という受け身の人間観に基づいたアプローチが主流になっているのです）

専門家による処方是客户的に正しいものとされ、それに抗う高齢者は抑制されるのが当たり前でした。そんな状況に心を痛めていた人たちに、『新しい介護』は新しい人間観と具体的方法を提案することができたと考えています。決して安価とはいえない本がここまで受け入れられた理由は、その点にあるのでしょう。

そしてこのたび、『新しい介護』の「全面改訂版」が刊行されることになりました。旧版が出版されてから10年が過ぎ、私たちの提案は現場に広く受け入れられるようになりました。ですが、まだまだ権威主義的な、旧態依然とした考えや方法が根強く残っています。

さらに、世界的なグローバルバリスムの流れが介護の世界にも及んでいます。介護内容の豊かさを、数字Ⅱ介護点数Ⅱ金に換算してしまおうという傾向が露骨になりつつあります。しかもそれが介護の世界を「近代化」することだと思いついでいる人までいる始末です。私たちはそんな皮相な近代化に対して、これまで切り拓いてきた介護の世界を、より生活や人生の広さと深さに届くものにするこゝで対抗していこうと思っています。

「金になるからやろう」「点数にならないことを、なぜ熱心にやるのか」などといった圧力に抵抗するのに最も有効なのは、一人ひとりの「物語」です。「この人の人生を考えると、こゝで手を引くわけにはいきません」といえるのが、よい介護職なのです。客観性より関係性を大事にし、人体ではなく人生に関わり、数字の代わりに老人の笑顔を生きがいにする、そんな介護職のために、この全面改訂版を送り出したいと思えます。よい介護は、「命より金」という風潮の社会に対しては常に新しいのです。だからこそ、再び『新しい介護』というタイトルにしました。

本書の刊行は、ライターの東田勉さんの尽力なくして実現しませんでした。末筆ながら、特に記して感謝します。